緑ネット通信 No.58

緑のネットワーク・まつど
代　　表：川上将夫
年 会 費：1000 円
口座番号：00170-9-696174
連 絡 先：高橋盛男 090- 2935- 9444

都市の緑を残すためには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動の目的は、みどり特に樹林の保護･保全を願う人やグループと連携しその輪を広げ，豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

受け継いだ緑を残す・・・戸定邸庭園に学ぶ

松戸のみどり再発見ツアー報告

藤田　隆

千葉大園芸学部,戸定邸庭園の緑は、矢切から北松戸,八ヶ崎,流山市前ヶ崎につながる、北総台地を江戸川の流れが削って出来た斜面林の一部である。江戸川から眺める斜面林の緑の帯、そして徳川昭武が眺めたであろう、江戸川の向こうに広がる東京の街並みと遠く富士を望む風景・・・この素晴らしい緑は松戸の宝であり、後世に遺すのが今を生きる私たちの課題ではないか。今回の再発見ツアーを通じ改めてその思いを強くした。

10 月 8 日（日）100 人を超える参加者が集まり、千葉大を目指した。大学に近づくにつれ、玄関先にエディブルウェイの布製のプランターを置く家々が目に付く。食べられる野菜を玄関先で育て、黒い布製プランターで街並みに統一感が出て、この町らしさが醸し出されている。大学が市民とともにまちの美観づくりに取り組んだ成果だ。（園芸学研究科木下勇教授の地域計画学研究室のグループが立ち上げた「エディブルウェイ食べられる道」プロジェクトが 2017 年度グッドデザイン賞を受賞した。～千葉大学園芸学部 HP より～）

洋風庭園はイタリア式、フランス式、イギリス式の 3 つの様式が見られた。園芸学部庭園わきにある与謝野晶子歌碑の説明を受け戸定邸への足を速めた。

昭武の思い描いた姿に

戸定邸庭園は徳川昭武が造園した当時の姿に復元しようと工事が進められている。復元工事に携わる島村さんにご案内いただいた。茅葺門で、当時の様子に思いを馳せた。坂は鬱蒼とした林、下から見上げると茅葺門が林の中にポツンとあったのではないか。

当時の写真や資料から、庭園には邸から見て左側にコウヤマキ、江戸川を望む右手にアオギリが並んでいたことが分かる。そこで、現に庭園に植栽されているクスノキ、ウメを別の場所へ移植し、新たにコウヤマキを一般の方から譲り受ける予定のようだ。

コウヤマキといえば徳川家、アオギリは天皇家との関係があると思われるという説明を聞きながら、

江戸から明治に劇的に変化した時代に生きた昭武が後世に残したメッセージではないかと思った。

芝生部分を掘り返してみると当時から10センチほど高くなっていることが分かったため、掘り下げて芝生を植えなおし、当時の写真にあったはずの飛び石がどこにあるのか出入りの職人さんから聞き出し、戸定邸の隅の方から見つけて、復元したそうだ。

見学を終えて、松戸駅までの道をご案内中、船橋市から参加した 90 歳を超える方が、「戸定邸を見学できる記事を見つけて、矢も楯もたまらず参加した」とステッキをつきながら帰途についた姿が印象的だった。

戸定邸庭園の復元について

松戸市戸定歴史館　島村 宏之

今回のツアーでご案内をしていただいた、戸定歴史館の島村様に、通信紙面でも解説して頂きました。

平成 27 年 3 月 10 日に戸定邸庭園は国の名勝に指定されたことに伴い、平成 28 年度から 2 か年で復元工事が行われている。戸定邸は明治 17 年に最後の将軍・徳川慶喜の弟・昭武が建てた邸宅で、明治期の徳川家の住まいがほぼ完全な形で残る唯一の建物である。

戸定邸庭園は日本庭園の様式である書院造庭園の和の構成に、西洋式庭園の要素が融合したものとなっており、草創期の洋風庭園の特徴を今日に伝えている。「座観の庭」として表座敷から床の間を背にして座って庭を眺めると、芝生地が広がっている。軒下まで芝を植えているのは洋風の張り方である。

戸定邸庭園は屋敷を訪れるお客様の饗応（おもてなし）の場として使われていたのが基本であったが、松戸町関係者が訪れた記録や芝生地で地域の子供たちが相撲をとっている写真があるところから、地域との交流の場としても使われていたと思われる。

庭園の左側（東側）にコウヤマキが現在４本植わっているが、当初は少なくとも８本あったことが明治期の写真や枯れた切株の組織鑑定から確認されている。円錐形のコウヤマキの木立ちが景観を構成する重要な要素になっている。これは昭武が 1867 年パリ万博でベルサイユ宮殿に招かれて洋風庭園に触れたり、その後再びフランスに留学していることと無関係とは思われないのではなかろうか。今年度、4 本補植される。

徳川幕府の祖である家康が眠る静岡県久能山東照宮・唐門脇や日光東照宮の墓所、水戸徳川家の祖・頼房の墓所にコウヤマキの巨木が植えられている。戸定邸にコウヤマキが植えられたことは、このことと何らかの関係があるのかもしれない。

庭園西側の江戸川を望むところには、アオギリが少なくとも 12 本植えられていたことが古写真から確認された。そのうち、植栽可能な 11 カ所に新松戸のアオギリ公園から移植される。なお、現在、アオギリが 2 本残っているが、共に腐朽菌で侵されているので植え替えることになっている。

かつて、戸定邸庭園の奥には茅葺屋根の東屋があり花見が行われていた。そこには昭和 40 年代から福島県の学生寮が建っていたが、平成 24 年度に買収し、一体の庭園として復元する作業を進めている。現在、地形復元が終わり、今年度中に東屋を建て、桜や赤松を植えることになっている。

参考文献：松戸市教育委員会『旧徳川昭武庭園（戸定邸庭園）報告書』2016.3／藤井英二郎「明治期の２つの名勝庭園 旧堀田正倫庭園・旧徳川昭武庭園の特徴」（『風媒花』29 号 2016.6）／小寺瑛広「旧徳川昭武庭園（戸定邸庭園）の饗応機能―大名華族家における江戸時代の継承―」（『国学院雑誌』1310 号 2016.6）

戸定邸庭園 明治 22 年 戸定歴史館所蔵

アオギリの木立ち越しに江戸川を望む 明治２２年
戸定歴史館所蔵

松戸市金ケ作地区の二つの民有林で里やま活動を続けている「三樹の会」は、「里やまボランティア入門講座」の３期生が立ち上げた団体です。新しい会員も増えており、夏休みには子どもたちのボランティア体験も積極的に受け入れるなど、大変活発に活動をしています。今回は三樹の会の藤井さんに、その全貌をご紹介頂きます。また、ご厚意で藤井さん発行「自然観察だより」250 号も同封させていただいております。身近なところにまだまだステキな自然があるのだなーと、うれしくなります。どうぞ合わせてご覧ください。

特別寄稿　「三樹の会」は こんな会

緑の中の活動と憩い

松戸里やま応援団 三樹の会　藤井 貴明

新京成線の常盤平駅と五香駅の北側には、江戸時代の牧（小金牧のひとつ中野牧）、徳川吉宗の奨励した新田開発、鹿狩（ししが）りなどの歴史が色濃く残る緑地が広がっている。それらの貴重な緑も今や宅地の中に浮かぶ小島（グリーンアイランド）のようになってしまっている。

三樹の会は、里やまボランティア入門講座2005年の修了生11名が設立し、金ヶ作の2つの森、『三吉の森（2006年2月から）』と『立切の森（2007年3月から）』で、緑の保全を中心にした活動を続けている。活動も10年が経過して会員の高齢化が進み、新たな方向を模索している。2017年10月現在の会員は32名である。

毎月３回の定例日(第一土曜日、第三月曜日、第四月曜日)に「森の整備計画」を基にした緑の保全が活動の中心である。また、みどりを通して市民との交流を深めるために、みどりと花のフェスティバル（21 世紀の森と広場）、オープンフォレスト、ときわ平さわやか広場、ミニ門松教室(ゆいの花公園の講座)等の催しに参加したり、市民活動サポートセンター主催の Let's-体験受講生を受け入れたりしている。

三吉・立切の森案内

三吉の森のシンボル　シラカシ

立切の森　コナラの紅葉

Let's-体験の受講生 … 初めて孟宗竹を伐採

オープンフォレスト … 金ヶ作自然公園を経て三吉の森に

三吉の森は、約10,000 m²、ケヤキとシラカシの巨木が茂る屋敷林が骨格となっている森である。中には竹林も広がり、イヌシデ、ムクノキ、コナラ、コブシ、モミやツガなどの大木もある。生物相の豊かな林内には散策路が整備されている。

立切の森は、約5,000 m²、明るい雑木林である。南側に常緑樹のうっそうとした薄暗い林の金ヶ作自然公園がある。会では出来るだけ雑木林が維持されるように作業を続けている。道路に沿った小さな森であるが、明るい林内では、多種類の植物、小鳥や昆虫が観察される。

活動を開始して11年、シュンラン、エビネ、キンラン、ギンラン、ヤマユリ等が数を増し、フクロウ、テングチョウ、ホソミオツネントンボ等も確認。

森の主 健在
（2017.10.28）

いろいろな経歴を持つ高齢者が主体の活動が長続きしているのは、緑の中でたっぷりと汗を流し、そのあと、時間をかけて飲食を共にし、好き勝手な話に花を咲かせているからか？

～しぜんのコラム 36～

ヤツデの花とツマグロキンバエ

寒くなると咲き始めるヤツデの花。冬でも暖かい日はハチやハエが飛んでいる。ヤツデ以外に咲いている花はほとんどないから、別の植物に花粉が届くというような無駄もない。それがヤツデの戦略だ。

それでも、自分の花の花粉が自分のメシベに付くのは避けたいところ。そこでヤツデの花はオシベが花粉を出す時期（雄性期）と、メシベが成熟して花粉を受ける時期（雌性期）をずらすことによって、自家受粉を避けている。

下の写真は雄性期。ヤツデの個々の小さな花に、5枚の白い小さな花弁と5本のオシベが見える。花の中央にはメシベがあるのだが、まだ小さく、花粉を受ける準備はできていない。

その後、花弁とオシベが脱落すると、花の中央のメシベが伸びてくる（雌性期）。ヤツデの花を見つけたら、そんな花の変化を確認してほしい。

ヤツデの花（雄性期）とツマグロキンバエ　2017.11.19　関さんの森

ちなみに、象の鼻のような口吻を伸ばして蜜をなめているのは、ツマグロキンバエ。7㎜前後の小さなハエで、お行儀よく翅は重ねて閉じている。翅の先端が黒いことからこの名がある。チャームポイントは、縞々模様の複眼。どうしてこんな模様があるのか、不思議な昆虫だ。

（山田純稔）

★松戸のみどり再発見ツアー44（観察学習会 59）

「緑の高垣、富士山、七福神…自然観察＆初詣に行こう」

小金北部に残された緑と冬木立のなか、社寺をめぐるコースを歩き、
暖かい室内で昼食。身近なみどりについて考えます。

１月１４日（日）　９：３０～１４：００（雨天中止）　**参加費３００円**（会員 100 円）
集合：ＪＲ北小金駅改札口前　９：30（現地解散）　**持ち物**：飲み物、弁当、雨具
問い合せ　090－2935－9444（高橋）　**その他**　歩きやすい暖かい服装でどうぞ